猫目石

下

栗本薫

講談社文庫

猫目石(下)
栗本薫
© Kaoru Kurimoto 1987

講談社文庫
定価380円

昭和62年7月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——大日本印刷株式会社
印刷——大日本印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。 (庫・・)

ISBN4-06-184018-5 (0)

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

猫目石（下）

栗本 薫

講談社

目次

第五章　迷路　七
第六章　真夜中のシンデレラ　一一
第七章　夏の終わり　一三九
第八章　麻衣子のために　二〇四
エピローグ　二七五
文庫版あとがき　二八〇
著作リスト　二八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

猫目石

(下)

第五章　迷路

1

と、いうわけで――

ぼくはぼんやりと、エンピツのしんをかみながら物思いにふけっていたのだった。

ぼくは、けさ、軽井沢から帰ってきたところだった。あすは、青山でとり行われるという、藤波武子女史――故・藤波武子女史の告別式に出なくてはならない。そのことを考えると、いまから気が重いのだ。

電話は、とっくに毛布とザブトンにくるんで押入れに放りこんでしまっていた。五連続殺人というだけでも、いいかげん殺人や血なまぐさい事件に食傷した奥さまがたの目をさえひきつける迫力はあるのに、犠牲者のひとりは落ち目とはいえ美人女優で、もうひとりは人気No.1の売れっ子女流大作家である。藤波女史はことに主婦に人気があった。まったく、向田邦子の飛行機が落っこちたとき以来というさわぎになっても、ちっともふしぎはなかった。

そこへ、居あわせたのが《英ちゃん》に一条司郎に朝吹麻衣子の家族に、大したことはないとはいえ栗本薫氏に〝日本のホームズ〟伊集院大介とそのワトスン、森カオルのコンビとあっては、もう四年に一度のオリンピック、みたいなものである。

山科さんが車を手配してくれたおかげで、報道陣や何とかレポーターのたぐいにもみくちゃにされることもなく、家まではぶじに戻りつけたけれども、帰ってみると東京は地獄のように暑いし、あすはどうあっても告別式に出て、ハゲタカの如きマスコミのえじきにされねばならないし、じっさいげんなりすることばかりだった。

しかし、これでも作家のはしくれ、それにあれだけのかかわりがあったからには、女史の告別式をスッぽかす度胸はぼくにはないし――となると、気の弱い男の行きつく逃げ道はたったひとつ、酒である。

そこで、ぼくはマンションのカギをしっかりかけて、昼ひなかから、酒びたりになっていたのだった。

しかしむろん、すっかり何もかも忘れてしまうというわけにはゆかなかった。たてつづけにみた死体が目にちらつくし、何よりもまずいのは、伊集院大介のことを考えてしまうことで――（伊集院大介は、いまごろのんだくれてなんぞいないんだろうな。――森カオルをあいてに、緻密な推理の見直しをしたり、アリバイくずしでも考えているのかもしれない）

そう思ってしまうので、ぼくの心はいっこうにやすまらないのだ。

別に、ぼくは、何度もいうように、自分のことを名探偵だ、などとは夢さら思っていないけれ

ども――しかし、事実上、伊集院大介とぼくとでは、条件はまったく同じ――いや、明らかに、ぼくの方が少し上まわっているのである。ぼくは、麻衣子とヒロの話や、宗像とみゆきの話をきいていたし、それに伊集院大介よりずっと前から女史の別荘に滞在していたのだから。

それなのに、伊集院大介にはわかっていて、ぼくにはわからないことがもし、あるのだとすれば――

五日間に五つの殺人。

一番はじめ、浮浪者が殺され、二番目に暴走族の少年。三番目は暴走族の襲撃があって、四番目に三人。もっとも、さいごの一つはすでに別の事件というべきかもしれないが。

パーティにいあわせた十三人の客と主人。

十三……

どうやったら、体面を失することなく、あしたの告別式をとんずらできるか？

いっそぼくが、六番目の被害者になってしまえば……

麻衣子。

麻衣子とうららは東京にいた。

突然、心痛のあまりひどい熱を出して、というのはどうだろう？

くにのおふくろが頓死して、というのは？

ダメかな。ダメだろうな。

唯一いいことがあるとすれば、麻衣子に会えることだが――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しかしそれももうおしまいだろうな。あの映画も当然お流れだろうし、もう女史のいなくなってしまった今、天下の大スターとかけだし作家をつなぐ糸は何もなくて……

どうやらぼくは本当に朝吹麻衣子を好きになってしまっていたらしい。ぼくより十二、年下の、父親はペテン師で母親は霊媒で、姉は？で兄は暴走族、という少女を。

しようがない。これからはせいぜい、麻衣子のブロマイドでもあつめるさ。それと「平凡」の記事の切りぬきと――麻衣ちゃんの好きな色はあわーいピンク。おやすみのときはいつも大好きなスヌーピーといっしょです。だってまだ麻衣子十六なんですもの。

紫の上。

浮浪者。暴走族。落ち目の女優に編集者、流行作家。

「そして誰もいなくなった」か、「ＡＢＣ」か「オリエント急行」か。それにしてもどうして、ぼくはパターン認識でしか、ものを考えられないのかしら？

伊集院大介なら……

十三人の客と主人。三人が死んで、十人になあった。

あと十人死ねば――「あとにはだあれもいなくなあった」だ。

じゃ、のこりの二人は、おまけってわけか。おまけつき連続殺人。グリコだな。

しかしどちらにせよ、探偵合戦をうけて立ったわけじゃなし、ぼくがどうして、そんなことを考えなくちゃいけないのか？　この件には、ちゃんと伊集院大介という名探偵がいるんだし、ワトスンもいる。

するとぼくの役どころは？　「ニッポン樫鳥」のテリー・リング、あのバカなタフな私立探偵か、「アクロイド殺し」のシェパード医師か、それとも――イジドール・ボートルレ少年かな？　ベイカー・ストリート・イレギュラーズか？　それともまぬけのグレグスンか、大鹿マロイか。

ほら、また、パターン認識だ。

ぼくが新しい一杯をつくりはじめたとき、突然ベルが鳴り出した。

さてはベルゼブルかアスタロトがぼくをつれに出現したか、と見まわしたが、それは何のことはないインタホンだった。チェ――誰かが、ここまでかぎつけて攻めてきたのだろうか？

布団をひっかぶって息を殺していることもできたのだが、ぼくは何者ならんとまずのぞき穴からのぞきにいった。もしナシモトだったらドアのすきまからイペリット・ガスを放出してやろう。しかし、のぞいたとたんにぼくはあんまりあわててチェーンを外しにかかったので、指をはさんでしまったくらいだった。

ドアをあけると、奇怪な風体（ふうてい）の人間がそこに立っていた。

年のころは三十なるならず――のはずだが事実上不明、顔じゅうヒゲだらけ、ぼうぼうの長髪にインドふうシャツとズボン――いまどき珍しい正統派ヒッピーか下痢のキリストか、どっちか、というくらい、電信柱のようにやせてひょろりとして、ほおのこけた――

「ワオ！　信（しん）！」

ぼくは、やにわに、長年の第一等の親友の胸に抱きついていた。

「なんて、いいタイミング――やっぱし、テレパシーかしらん。生きてたのかよッ」

「はい、薫」
おちつき払って、石森信は云った。
「なんか大変だったらしいな。――なんだヨ、お前、まっぴるまから、もう酔っ払ってんの？」
「もう、やめるよ」
ぼくは信をつかまえて、ひとくさり「スリラー」の一節を踊ってから、信をへやにひきずりこんだ。
「下に、なんか車がとまってたヨ」
信がいったのは、カギをもとどおりかけ直してからだった。
「カメラとテレコ持った奴がのってたけど――何かやったんか、お前？」
「冗談じゃないよ！　――まあ、とにかく、きいてくれよ。ぼくももう、ほんと、疲れちまって……」
「そのまえに、何か、食いもん、ないか」
信は云った。
「やっぱし、断食は性にあわん」

「――と、まあ、大体、こういういきさつだったんだけどさ」
一気にまくしたておわって、ぼくはほっと深い息をついた。

もしかして、ぼくに必要だったのは、ひとに話すことで考えをまとめ、気をおちつけることそのものだったのかもしれない。話しおわると、もう酔いも半ばさめていたし、気分もさっきまでとは、ぜんぜんちがっていた。

「ふーん。そら、大変だったな」

信はタバコを吸いながら云う。もともと、どことなく仙人めいた、物に動じないやつだったが、インドに入れこんで何回も行ったり来たりしているうちに、いよいよ仙人めいてきて、いまやほとんど伊集院大介とさえ対抗できそうだ。

「で、お前、もうそれ、解いたわけ？」

「解いちまってりゃ、こうまで悶々とはしやしないよ。むろん、いくつかの可能性は思いつくけどさ――はっきりいって、伊集院大介にだって、まだズバリ犯人を指摘できるだけのデータは、そろってないとぼくは思うんだけどなあ」

「だろうな。さいごのなんか、きのうの今日だろ」

信は体が楽なようにすわり直した。

「そうかんたんにホシが割れるもんなら、お巡りはいらんだろう。そうだろ」

「そうそう。特に、しかし、さいごの藤波女史殺しは特別だ、と思うんだけどね」

「特別って？」

「つまり、あれは、犯人にとっては、予定外の殺しだったんじゃないか、とぼくは思ってるわけ」

「予定外ね」
「そう。いかに凶悪な犯人でも、あと何分か、何十分だかで警察がやってくる、というタイミングをえらんでは殺人なんてしないと思うよ。もしせずにすめばさ。――それにもかかわらず、それだけの危険をおかしてあえて女史を殺したということは、犯人には、それだけの理由、切羽(せっぱ)つまった理由があったということじゃない？」
「だろうな」
「どうしても、警察がきてからじゃおそすぎるという――何だと思う？」
「まァ、警察に何かしゃべられちまうから、口封じをせにゃならんとか、そういうことだな」
「そう。それで、思い出したのが、女史がパーティのときに酔っ払ってね――」
（よろしいですか。わたくしは、この連続殺人事件の謎を、みごと、といたのですよ。ああ、思いもよらぬ犯人！　おどろくべきトリック！　私、ちゃんと、ときましたよ。何もかも、わかったのよ！）
あの声はかなりでかかった。たぶん、パーティの客全員にきこえただろう。
もし、その中に犯人がいたら、脅威を感じただろうか？
「しかし、そいつは、少しうけあえないね。だって女史は、とんでもねえ見当ちがいを考えていたかもしれんわけヨ。それを、たしかめもせずに、そんなどたん場で殺すかね、いかに女史の推理力を信じてたとしても？」
「そう、そいつはちょっとね。それに、女史がそういってたのは、はじめの二つのことで、あと

の二つにも、同じ犯人が適用できるのかどうかはわからんわけだし。むしろ、あとの二つ――三つだけど――がおこったから、女史の考えがまちがってたことがわかる可能性もおおいにあるわけだろ。とすると、ぼくとしては、むしろ女史の推理じゃなく、女史の知ってたこと――あるいは女史が見たり、きいたりしてたこと、女史がそのことの大きな意味に気づいていたかどうかはともかくとしてだが、ともかくこの事件のキーになるものか人かことがらを、知ってしまったか、見たか、きいたかした――そのために、ああいうことになったんだと思うな。あるいは、それは、犯人だけにしかわからないことだったかもしれないし」

「しかし、よく、それだけ変ちくりんな人間ばかし集まったもんだな」

感心したように、信は云った。

「それだけヘンなやつばかしいて、それだけ入りくんでりゃ、たしかに殺しの五つや六つおこったっておかしかないわな」

「そうなんだよね。それに、これは、たぶん見かけほど単純な動機や手口じゃないと思う。はじめは浮浪者仲間の仕返しとか、広志がみゆきを強姦しようとしてとか警察はいってたけど、一つ一つはもっともらしいけど、同じ家で、たった五日かそこらのあいだに、そんなことが五回もたてつづけにたがいにかかわりなくおこる、なんて考えられるのは五十嵐さんくらいなもんだよ。こうなると、はじめの二つからしてちゃんと見直していかないと」

「ふん、ややこしいな」

「そう、中でもややこしいのが人の出入りでね。これは、わかりやすく表にした方がいいと思う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com